

# 長崎北病院 伝言板 10月号

令和6年10月1日発行

10月。朝晩は過ごし易くはなりましたが、まだ日差しは強烈。大変な炎暑、酷暑の夏、そして残暑。あまりの暑さに蚊も少なかった気がします。この気候のせい、春に咲く木蓮（モクレン）や石楠花（シャクナゲ）が今頃咲いていました。陸上では花さえも咲く季節を間違え、海では鰹（カツオ）が北海道で大漁だという。木蓮は春の使者、カツオは高知か鹿児島がよろしい。やっぱり異常気象。

## 「つばむしらんとよ」

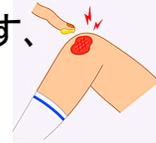
能登半島で大雨被害。ここは正月の地震で壊滅的な被害を受けました。交通の便が悪い上に道路も寸断、水道、電気も届かず。打ちのめされながらも少しずつ少しずつ立ち上がりかけたところで再度の被災。1月の地震から8ヶ月、遠くに薄灯が見えたかもと言う時期に、全てを吹き消し、さらに流し去る大雨災害。一度は立ち上がりかけたところでまた倒される。再び立ち上がる気力は一度目の何倍も必要。諦める、立ち去る人も出るはず。災害は数々あれど連続被災はきつい。消防、自衛隊、警察、ボランティア。さらにお金。裏金には一円でも厳しくする必要があるが、こんな災害の復興に人や金を注ぎ込むのに文句はなかる。能登の人々の気力や希望が消えぬうちに急いで欲しい。

ご当地長崎は1982年の長崎大水害、1991年の台風19号以来、あまり大きな自然災害には襲われていない。これはただただ僥倖、幸運なだけ。「天災は忘れた頃にやって来る」。明治～昭和の科学者寺田寅彦の警句です。いつか来る、きつくるの気持ちで他所での災害



のたびに明日は我が身と日々の備えの準備、再点検が必要です。

さて、先日の会話から。「つばむしらんとよ」。文字で見ると何かの呪文か外国語か。おそらく長崎以外の方、若い方には意味不明。最初の「つ」という一文字。これは標準語で言うと「かさぶた」、医学用語で言うと「痂皮」。むしろは「皸る」。剥がす、引き抜くと言う意味。「つばむしらんとよ」は「カサブタを剥がしたらダメよ」となります。昔は膝など擦りむいたら「赤チン塗るときなさい」と言われて、赤い液体を塗って乾燥。赤黒混じった立派な硬い「つ」ができていました。痒いし、がさつので「むしろ」とまた血が出てとなります。最近ではケガするとキズテープを貼ることが一般的。乾燥よりも湿潤環境が綺麗に早く治ると言うことで保湿系のテープ剤などが使われます。立派な「つ」は見られなくなりました。昔はどここの家庭でもあった「赤チン」。正式名称「マーキュロクロム」。有機水銀化合物です。



有機水銀ですが毒性は低く、消毒薬として安心して汎用されていました。しかし、水俣病などもあり、全ての製品で水銀を使用しないとなりました。安全な「赤チン」も製造、輸入禁止です。以前病院で使っていた「水銀血圧計」「水銀体温計」も消えていきました。蛍光灯も水銀蒸気が封入されているので2027年までで製造、輸入ができなくなります。時代です…。長崎弁もだんだん消えそうですが時々聞くと暖かい。長崎弁バリバリの先生からの電話。「わいさー」から始まります。一般的には「わい」は「私」のこと。ところが長崎弁では「あなた」のことです。自分のことは「おい」になります。「わい」はどがんしちょっとね。おいは元気しとるばい」は「あなたはどうしてますか。私は元気です」となります。「いっちょんわからん（全くわからない）」「そがんだんじゃなか（そういう場合ではない）」かもしれませんが聞くとほっこりします。わからない時は誰かに翻訳を依頼してしてください。そのお菓子「とっととさ」。食べないでね。(A.S.)

